江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆　吉則

いよいよ動き出す子実トウモロコシ

先日、テレビ東京の報道番組、ワールド・ビジネス・サテライト（ＷＢＳ）で子実トウモロコシが取り上げられた。本誌3月号を読んだ同番組ディレクターのＡさんが、ウクライナ動乱による食料調達不安に絡めて番組化してくれたものだ。

木曜日に電話があり、月曜日には放送だという。まず、北海道の柳原孝二さん他を紹介したが、局のコロナ規制で北海道には行けないという。それでも、北海道の関連局の取材で柳原さんを取材し、柳原さんが撮りためていた映像で各種のコンバインでの収穫作業も放送された。茨城県で養豚を行なう塚原昇さんの需要者としての言葉や、農水省からも良いコメントが引き出されていた。

そして、これまでトウモロコシの国内生産がなかったために貯蔵施設を含めた物流のインフラがなく、それが面積の拡大を阻んでいると言う柳原さんのコメントもしっかり放送され、短い時間ではあったがとてもよくまとめられていた。

２０１３年に府県で初めて子実生産を目的としてトウモロコシ作りを始めた岩手県の盛川周祐さんと大潟村の宮川正和さん。その秋に宮川さんの圃場で実演検討会を行なったときにカメラを担いで大潟村まで来てくれたのがその番組ディレクターだった。そもそも盛川さんや宮川さんにしても柳原さんのチャレンジを意気に感じた僕の口車に乗せられたともいうべきだが、まさにＡさんもその一人だった。

２０１３年以来、春と秋、毎年各地で実演検討会を開き、時には東京でシンポジウムを開催してきたが、個人的に共感してくれて研究会に参加してくれる官僚はいたものの、最初の数年間は農水省も全く無視。そんな時代に取材に来てくれたのは朝日新聞とテレビ東京。その媒体がというより記者個人の興味で取材し、記事にしてくれた。朝日新聞は14年に正月の大型記事として紹介してくれた。実演会のたびに農業メディアに案内を出していたが黙殺されてきた。それが交付金の対象となると農業メディアの取材が始まった。

テレビの力は凄いものだ。ＷＢＳのヤフー記事版には放送数日後で８００件以上のコメントの書き込みがなされていた。その多くは農業の現実をあまり知らない人々のようだったが、ともかくも話題になることだけでありがたい。僕のところにも上場需要先企業から話を聞かせてほしいと声がかかり、政治家からも改めて電話があった。

しかし、課題は貯蔵施設だけではない。需要企業が生産そのものに関与してくることが肝心なのだ。加工用馬鈴薯が今のようなメジャーな作物になったきっかけは、70年代中頃にカルビーが北海道の農協に貯蔵施設建設を支援したことに始まる。当時、カルビーの松尾雅彦氏（故人）は、まだポテトチップ業界全体の産業規模が50億円にも満たなかった時代に「やがて馬鈴薯産業は１０００億円産業になる」と言い放っていた。今、カルビー1社で馬鈴薯関連部門だけで１３００億円弱となっている。子実トウモロコシもそうなってほしい。生産サイドだけではだめで、商品開発とマーケティングを担う需要企業が本気になって取り組むことが必要なのだ。